

極低出生体重児の発達に関する経時的研究

大正大学大学院人間学研究科福祉・臨床心理学専攻 博士後期課程
高橋美和

要旨

現在、出生体重が 1500 g 未満の極低出生体重児(Very Low Birth Weight Infant:以下 VLBW 児)の発達に関する様々な問題が指摘されている。これまでは視覚障害、脳性麻痺、知的障害といった主要な障害に関するものが報告されてきたが、最近では軽度発達障害にみられるような認知機能の特性など比較的軽微な障害に注目が高まり、知的能力の偏りや、行動上の問題、注意機能の問題などに関する報告が目立つようになった。そこで、重度の神経学的な障害のない VLBW 児を長期的にフォローし、適切な援助の在り方を具体的に検討することが求められているが、幼児期から児童期にかけて継続して行われた研究は少ない現状にある。本研究では、対象を普通学級に就学した児童(就学予定者を含む)とし、①VLBW 児の知的能力、②VLBW 児の注意機能、③VLBW 児の行動上の問題の 3 点から 6 歳、9 歳、12 歳時点の発達的特徴を検討することを目的とした。

第 1 章では VLBW 児と周産期医療に関する現状を分析した。日本の総出生人数に対する VLBW 児の割合は、1975 年は 0.3%、2000 年は 0.5%、2009 年は 0.6%と増加傾向にあり、1000g 以下の超低出生体重児の出生数は 35 年間で約 2 倍となっている。出生体重の小さい子供が生まれる背景には、①妊娠期間が短い時期に生まれること、②妊娠期間が十分でも胎児の発育が不十分であることに大きく分けられるが、最近では、不妊治療の増加にともなう多胎妊娠の増加、妊娠期間短縮、分娩方法の変化など様々な要因が関与していることが示されている(吉田,2014)。特に、周産期医療の向上により早産児・未熟児の救命率が上がっていることが大きな要因のひとつとして捉えられており、必然的に VLBW 児は増加傾向にあることが指摘されている。

第 2 章ではこれまでの VLBW 児に関する研究について、1)VLBW 児の発達予後と発達障害の併存について、2)精神発達と知的な能力及び認知機能の 2 点に絞り概観した。VLBW 児には様々なリスクが高いことは既に多くの研究で報告され(河野,2013;Petrini,2009)、明らかな神経学的問題がなくとも学習障害や注意欠如/多動性障害など発達障害を持つ児が多くみられる(金澤,2014;JohnsonS,2010)。学齢期となった児の就学状況をみると、約 80%が普通学級へ就学している状況にあるが、学業不振である児も多くみられることや、通級指導の必要性が高い児童・生徒がいることが明らかとなっており(上谷,2013;森岡,2013;中野 2015)、学齢期以降の継続的なアセスメントと支援が必要とされている。知的な能力は、出生体重 1000g 未満や在胎週数 28 週未満の方が低い(押木,2003)、障害を合併していない集団に限定した WISC-III 知能検査の結果では、IQ は概ね平均的であることが報告され(河野,2013;平

澤,2013), プロフィール特徴として, 動作性が言語性に比べ低いパターンを示す児が多くみられること, 群指数の特徴として, 「知覚統合」, 「処理速度」に落ち込みがみられる児が多いことが指摘され(高橋,2016;平澤,2013;石井 2006), 空間認知の弱さや目と手の協応の苦手さに関する報告は年齢を問わずある程度一致している。

第 3 章では現在の日本におけるフォローアップの状況と研究について述べた。出生体重が十分でないまま出生した VLBW 児は, 生後まもなくから新生児集中治療室(NICU)に入院し医療的ケアを受けることとなるが, 第 2 章で示したように, 退院後も発育や発達に関して十分に注意する必要がある, 長期的なフォローと経過の報告が望まれている。

第 4 章では本研究の位置づけと目的を述べ, 第 5 章では 6 歳, 9 歳, 12 歳の各年齢時について, 1)知能検査の結果, 2)注意機能に関する結果, 3)行動上の問題に関する結果を報告した。第 6 章では, 児の発達特徴とその経時的変化について, そして, 具体的な支援に向けて重要な視点を対応について総合的な考察を述べた。

本研究で得られた結果について述べる。VLBW 児に認められた知的能力の大きな特徴として, 各年齢時点で一貫して VIQ に比べ PIQ が有意に低い特徴があることが示され, また群指数では「処理速度」や「知覚統合」に落ち込みがあることが明らかとなった。いずれの時点でも, 目と手の協応動作や視知覚の機能の弱さが認められることが示され, これらの結果は支援する際の有効な手掛かりとなると考えられる。また, 行動上の問題として「ひきこもり」, 「社会性の問題」, 「注意の問題」が特徴的にみられることが明らかとなった。IVA-CPT を用いた衝動性や注意力の検査の結果でも, 特に 9 歳時では「不注意」の傾向のみが高いことが示された。VLBW 児は出生体重や在胎週数が少ないことを背景にした集団であるが, 知的能力における「動作性」や「処理速度」の落ち込みは年齢が上がるにつれ目立たなくなっていくこと, 出生体重や在胎週数から受ける影響は年齢が上がるにつれ徐々に小さくなっていくことが明らかとなった。現在, VLBW 児は「後遺症なき生存」が実現され, 小さく生まれた子どもたちの多くが学齢に達するまでにその身体発育の成長はキャッチアップし(福田,1991), 読み能力など言語面においても, 小学校高学年にはキャッチアップすることが指摘されている(井崎,2015)。今回の結果は, 成長するにつれて認知機能においてもキャッチアップ, つまり, VLBW 児に特徴的にみられる認知機能の偏りが薄まっていくという可能性があることを示唆していると考えられる。今回, VLBW 児に特徴的に認められた空間認知や目と手の協応の弱さは, 運動や学習などを含めた学校生活を送る上での活動・課題に大きな困難を生じさせることが予想される(Webber,2008)。そのため, 出生後から少なくとも義務教育期間にわたり支援を継続していくこと, また本人の特性と学校生活などの環境を踏まえながら適切な配慮をしていくことが重要である。

本研究の限界として 6, 9, 12 歳の各時点の発達の特徴を捉えることに留まり, 得られた発達の特徴の年齢時変化の背景や, 環境的因子に関しては十分に論じることができなかった点が挙げられる。また, 各年齢段階の発達の特徴を述べてきたが, 統計処理における量的な分析の実施が困難であった点から, 経時的な変化に関して十分な議論をすることがで

きなかった。今後は、さらなる研究の蓄積と、臨床心理学的な観点から具体的な支援を実践していくことが望まれる。

VLBW 児の増加は社会的問題であり、支援体制を構築していく必要があるが未だ十分とはいえず、緊急の課題と考えられる。先行研究から、VLBW 児は知的能力における問題、注意の問題、行動上の問題などは一般児に比べて高いと考えられており、結果として社会的予後の悪さや二次的問題の多さを認めることとなっている。しかし、適切で良質な支援が継続してなされていくことで、このような問題の減少がみられる可能性があると考えられ、具体的にどのように支援を実施していくかが重要な視点である。本研究の意義は年齢段階における児の発達の様相を明らかにし、適切な支援や介入を実施する際の足掛かりを提示していることにあるといえ、本研究で得られた示唆が、VLBW 児のアセスメントや支援の一助となることを期待したい。